

学会報告

シンポジウム 「道教儀禮の理論と實際」

福井文雅

「早稲田大學が主催校になって、來年の道教學會をしてくれまいか？」と言う打診が日本道教學會の野口會長から有ったのは、何時のことであつたらうか。正確には記憶していないが、とにかく一昨年夏近い話ではあつた。「度々早稲田大學では開催して來たはずですが？」と問い返したところが、「いや、この二十年來早大は主催校に成っていないのですよ」と言う野口氏の答で、私は仰天した。何故ならば、道教學會が發足して以來、本部が長い間早稲田大學文學部（東洋哲學研究室）に在り、私は大學院學生の頃から長年、なにかと言うとその事務にタッチして來たので、もう既に何回も年次大會を主催して來たように思つていたからである。しかし、實際にはそれは錯覺であつたらしい。

「開催するかどうかは、正式依頼が來てから同僚諸氏に相

談するにしても、ともかくも一應會場だけは確保しておかねば」と思つて、早稲田大學國際會議場に慌てて假り申込みをしたのは、平成六年（一九九四）七月のことであつた。

その後色々といきさつはあつたが、十一月四日（金）に會場借用の申込みを再確認、そして次の日の五日、高野山大學での日本道教學會役員會に福井文雅、土田健次郎の兩名が出席した折り、第三十六回大會は早大で開催されることが決定された（同じ役員の小林正美氏は在外研究員として中國に長期出張中であつた）。

翌日の六日（日）、高野山大學で道教學會會員總會が開かれた折り、次期開催校として早稲田大學が正式に披露され、開催校の代表として福井が挨拶を行った。

こうして、日本道教學會第三十六回大會は平成七年（一九

九五)十一月十一日(土)に早大國際會議場(井深ホール)で開催されることになったのであるが、例年の體裁に加え、何か新味を加えたい、と言うのが開催を依頼された私共の氣持であつたし、また、會員の多くの方々の希望でもあつたようである。そこで考えたのが、標記のシンポジウム「道教儀禮の理論と實際」であつた。學會の個別的硏究發表は午前中に宛て、午後をこのシンポジウムに使用とする案であつた。今後の參考に、また研究室の記録の爲に、以下、その實現に到るまでの経過と當日の實際とを書き記しておくことにしたい。

一 開催まで

高野山大學での大會から歸京して直ぐ、八日晝に、私は岩田孝教授(現、東洋哲學專修主任)にそれまでのいきさつと今後の見通しとを説明し、また、土田教授と明神洋助手(當時)共々早大國際會議場まで出かけて、實地に會場の廣さ等を再確認し、今後の計畫を立てたのである。

歳を越えて、翌平成七年(一九九五)四月十八日(火)十二時半〜十三時に、道教學會開催第一回準備委員會を早大文學部第七會議室(第二研究棟六階)で開催した。早稻田大學

シンポジウム「道教儀禮の理論と實際」(福井)

の教員の内で道教學會會員に成っている方々に、「開催準備委員會」の名で出席をお願いした(問い合わせ先は森由利亞・東哲專修專任講師)。當日の出席者は次の方々であつた(順不同、敬稱略) |

菅原信海、福井文雅、小林正美、土田健次郎、大久保良峻、森由利亞、森和也(以上「文學部・東洋哲學專修」所屬)、福井重雅(東洋史專修)、松浦友久(中國文學專修)

堀誠、柳瀬喜代志(教育學部・國語國文學科)

八月二十日には、早大總長へ大會當日祝辭を下さるように入校代表の名前で正式に依頼した。同時に、來會者用に早稻田大學周邊地圖も作成。九月五日(火)午前中には、大學院學生に依頼して、大會開催關係書類を發送した。

これと並行して、土田氏は準備狀態全般を把握して、主として東洋哲學專修に屬する大學院學生三十數名と共に、各種の準備を進行した。

十一月七日二時から、開催準備會を開き、小林、土田、森由利亞、森和也、その他私も含めて最終的な打合せを行った。

その段階で、準備と開催中の役割分擔と主責任者は次第に

次のように決まつて行つた——シンポジウムの爲に來日される外國人への連絡と接待には福井(文)、當日の總合司會には小林正美、國內會員の受付等々の事務全般には土田健次郎と森由利亞。

ここに特筆しておきたいのは、これ以外の方々からの御協力である。例えば、前掲の「開催準備委員會」のメンバーの方々や、東洋哲學專修岩田孝主任は、陰に陽に助力を惜しまれなかつた。「道教」研究を専門にするわけではない方々の助力が、今回の學會に一つの「重み」を成していたことは確かである。會員では、山田利明東洋大學助教授が、多額の開催補助金を雜費用に寄附された。

さて、十一月八日に劉枝萬博士御夫妻が九州經由で上京されたので、私は前もつて當日の内容について御教示を頂くことが出來た。十日朝には、遙々オランダからシペール教授 K. M. Schipper が到着、早大の「リガ・ロイヤル・ホテル」に投宿(私は、昨春秋バりに學會で行つた折りに、發表テーマ等々について彼との打ち合わせを済ませている)。夕刻には、臺灣から陳榮盛道長の令弟と御長男の三名が同じホテルに到着された。陳氏の許で道教儀禮を學ばれた淺野春二氏が

送迎役を引受けられた(今回、淺野氏はこの會の打合せにわざわざ臺灣まで出向かれた)。劉枝萬、シペールの二氏は五時からの道教學會理事會に出席された(早大大學院學生二階堂善弘が案内役。同君は、道教研究の爲に臺灣と北京の兩方に留學していた)。

理事會の後、リガ・ロイヤル・ホテルの一階で、シンポジウムの打合せの爲、シペール、陳榮盛等々關係者が集まつて打合せ會を開いた。

二 學會當日

學會事務局の本部を國際會議場内の「市嶋記念會議室」に設置、會場設定や受付等の總責任者には土田健次郎、補佐に森由利亞、森和也が當つた。東哲專修ばかりでなく、演劇や東洋史、美術史の各專修の早稻田大學大学院の學生諸君に、ヴォランティアで協力を求めた。會場に吊るしたプログラム題目書寫には書家の綾部光州早大講師、早大演劇博物館の展示と當日の録畫については平林宣和助手、圖書館内の道教關係古寫本や古刊本、澤田瑞穂寄贈圖書の特別展示には早大圖書館(特に岡澤憲美圖書館長と小林邦久氏他の特別資料擔當係)、その他多くの方々からも多大の協力を得た。圖書館特

別展覽室は特別に六時まで開室を延長して、便宜を圖つて下さった。

當日の午前中は個別研究発表、午後のシンポジウムは一時半から四時まで、次のような式次第で進行された。

司會（開會・閉會の辭）

福井文雅

司會補助―前田繁樹

一「民俗學から見た道教儀禮」（日本語）

臺灣國立中央研究院・民族學研究所・

元專任研究員

劉 枝萬

二「宗教學から見た道教儀禮」（漢語）

ライデン大學兼フランス國立高等研究院

（宗教學部門）教授

クリストフ・シペール

〔通譯〕早稻田大學大學院・博士課程 二階堂善弘

三 祝辭

早稻田大學總長

法學部教授・法學博士

奥嶋孝康

四 挨拶

臺灣正一教道長・道教世界總廟副長老（日本語）

陳 榮盛

五「道場科儀」についての解説

東北大學助教

丸山 宏

シンポジウム「道教儀禮の理論と實際」（福井）

國學院大學講師

淺野春二

六 道教儀禮の實際

―道場科儀―

陳 榮盛

絃と小太鼓の伴奏― 令弟、令息

左隅に置いた垂れ札を捲つて、儀禮の進行順序を會場に示す役には丸山宏、淺野春二、シペールの三氏が、ヴィデオに據る儀禮の記録には平林宣和助手が當つた。觀衆の中から、石井雅氏もほぼ全景を撮っている。

このシンポジウムを一言で覆うならば、それぞれの分野では第一人者の方々がこれだけ一堂に會し、また道教儀禮を嚴修したのは空前であり、各位の年齢も考え併せるならば、同様の催しの實現は絶後と言つても言い過ぎではないであろう。

早稻田大學總長が超御多忙の中を割いて見えられ、熱のこもった祝辭を下されたのも、實に得難いことであつた。創立者の大隈老侯の對アジア觀も含めて早稻田大學と中國との長い關係史・人物交流史や、他の大學に先驅けて「道教」研究を講座中に創めた早稻田大學の立場など、説き去り説き來たつて會場一杯の聴衆に深い感銘を與えた。

實際、聴衆は多かつたのである。年次大會の例から豫想し

て、それでも多めにと言うことで、參考資料は二百部刷つて用意してあったのが足りず、急遽更に増刷しても尙お足りない状態であった。座って四百名定員の大ホールが満員の大盛況であった。

來會者の中に、郡司正勝、酒井忠夫兩先生のように道教會の會員ではないが、宗教や演劇等の研究の面で高名な方々の姿が多かったことも、本學會の特色であった。柳瀬廣（東方學會事務局長）や高津良子（平河出版社『道教事典』編集者）、中川正生、日吉尙孝（共にTBSブリタニカ部長）も聴衆の中に見えた。

道教會の祭壇は、わざわざ臺灣から持参した法具で多くは飾ったが、日本で間に合う品々、例えば燭臺や木魚の類は阿純章（東哲大大学院生）の自坊の天台宗圓融寺（阿純孝住職、早大東哲出身）から拝借した。こうして、實に莊嚴且つ見事な壇が大學院學生諸君の作業で建立された。

そのような聴衆と道場とを目の前にしては、陳榮盛師と令弟、令息が、乗りに乗ったものも無理はなかった。時間の關係から割愛する豫定であった儀式を次々に嚴修してしまつて、垂れ札に解説が入っていないので、關係者を慌てさせたほどである。

ほぼ時間通りにシンポジウムは完了したのであるが、何と云つても、これだけ盛り澤山では時間が足りなかつた。道教儀禮について、大淵忍爾、澤田瑞穂の兩碩學にコメントをお願いする豫定であつたが、その時間は到底無く残念であつた。しかし、半日で全てを果たすのは無理であり、さりとて、丸一日を「道教儀禮」に充てたのでは學會の年次大會にはならなくなってしまうので、短いながらも、道教研究で世界有數な方々に實際に會つて直接話が聞けた、と言ふことだけで良しとせねばならないであらう。それだけでも、今回の企畫は十分意味があつたのではなからうか。

シンポジウムに引續き開かれた「會員總會」（司會—土田健次郎）のあと、懇親會が大隈會館のガーデンハウスで賑やかに催された（司會—工藤元男）。本田濟元學會長、シペール教授等々の挨拶の後、陳榮盛師一族や會員以外の賓客を圍んで、和氣藹々と懇親の會はいつまでも續いた。河内昭圓教授の閉會の辭で夜八時に解散となつた。

その後、事務局の慰勞會は土田氏に任せて、私は柳枝萬御夫妻と陳榮盛、シペールの兩氏を主賓に、野口會長や岩田孝早大東哲主任、丸山、淺野兩氏等々と共に、ごく少人數で慰勞と感謝の二次會を赤坂のピアノ・バーで開いた。私は陳榮

盛道長とは三十年來の付き合いで、氏が日本の流行歌の愛好者であり、日本の戦前・戦後の歌謡曲に精通していることをよく知っている。硯友シペールも實はまた同様である。そこで、ピアノ・バーに案内したのであるが、カラオケに關する兩師の博識と美聲とは一同驚嘆したものである。もっとも、道教では道士は美聲でなければ信者は満足しないので、當然のことであるのかもしれない。

〔附記〕 當日の道教儀禮「道場科儀」の詳しい内容は、東方學會が七月刊行の『東方學』92輯に掲載豫定である。